

略○中 明和七年庚寅の頃、長崎に赴く、大通詞吉雄幸左衛門が家を主とす、阿蘭陀本草を學び、エレキテルセイリタイトといへる奇器人身の火をとりにてをつくる事を學び得て歸り、専ら蠻學をなす、或は伽羅の櫛郭公などの細工あり、をづくり、或は金から革等を作りてつねの産とす、

〔平賀鳩溪實記三〕源内櫛の事

源内は、種々心を配りて、兎角世上へ流行事を工夫しけるが、風と思ひ付て、伽羅を長崎より多く持參しけるを取出して、是を櫛に挽せて、銀にてむねを一分通りに覆輪を懸、是を世上へ弘めんと、當時吉原にて名高き遊女、丁子屋の雛鶴こそ歴々も御出なさる、名あるものなれば、何卒彼にさ、せんと便をもとめけるに、こゝに一瓢といへる牽頭カウコ持あつて、淺草茅町に住居しけるが、彼を密に招き申しけるは、略○中 何卒其方が宅へ招き、我等が胸中をはらさせよと餘儀なき體に申し、一瓢略○中 早速承引して、略○中 雛鶴が座敷へ行、四方山の物語して申しけるは、雛鶴さまへ、近頃餘儀なき御無心御座候、御叶ひ可被下やと改めて頼ければ、略○中 相應の事ならば、承知致さんと申しける時に、略○中 一瓢は大きに悦び、直に源内が宅へ行て、まかしの趣を語りければ、源内は大きに悦び、明るをまつて一瓢が宅へおもむきけり、

源内雛鶴へ初て對面之事

斯て源内は約束の日限にも及ければ、供人召連れ、一瓢が方へ趣きけるが、未だ雛鶴は來らず、一瓢も酒肴の設念比にして、今やをそしと待居たり、程なく雛鶴は駕籠にうち乗、一瓢が表口へ這入れれば、待まふけたる一瓢、やがて座敷へ案内して源内へ引合せけり、源内も興に入て、酒數獻に及て、已に日も西山に傾きたれば、源内雛鶴へ申けるは、先もつて今日は日比の存念晴候て、此上もなき大慶なり、今日の悦、何ぞ進上申たけれど、指したる土産もなし、是は近比、魚末ながら、先年我等長崎表より持參せし伽羅を以て、態々此度挽せし櫛也、用立てくれられなば、大悦至極と